



History 歴史探訪

豊かな土地と水運が産地形成の要因

ナシや桃に代表される本市の特産品、果樹。いつごろから、どのように広く栽培されるようになったのでしょうか。

新飯田・茨曾根は古来からの産地

古文書から推察すると、本市で最も早く果樹栽培が行われたのは茨曾根、新飯田です。しかしその時期は明らかではありません。中ノ口川のほとりに植えられた桃林の美しさは、良寛をはじめ、多くの人が詩に託しました。桃は花を觀賞したり、食料、漢方薬として古くから大切にされた木でした。

江戸時代の終わりごろから明治初年にかけて白根郷内で植えられていた果樹は桃、梅、柿、ナシ、リンゴ、ビワ、イチジク、桜桃、ブドウなどです。その中で、商品として最も優れていたのは桃とナシでした。

明治四十四年発行の「新潟県園芸要鑑」によると、茨曾根のナシの栽培の始まりは今から約二百年前（一七一六〜一七三六）保年間（一七一六〜一七三六）



生産量、面積ともに県内一を誇る本市のナシ、桃、ブドウ。さらにまだ生産量は少ないものの西洋ナシ、リンゴの生産も県内トップクラス。味覚の秋に果樹王国白根の秘密を探ってみました。

白根 果樹見聞

といます。それ以前は桃を栽培していたと書かれていますから、桃の栽培の歴史はナシよりも古いことが分かります。郷内で果樹栽培が盛んに行われた理由は幾つか考えられます。一つには、信濃川と中ノ口川の運ぶ豊かな土壌の河川敷が、果樹栽培には申し分なかったこと。さらに恵まれた水運を利用して、遠方にも早く大量に運ぶことができたこと。また、米や野菜は水が上げれば破壊的な被害になりますが、果樹はそうした心配が比較的少なかったこともあり、ます。ただ果樹は病虫害に弱く、風が強い所は栽培に向きません。そこで北西の風を防ぐのに、川の堤防が自然の囲いになっていたとも考えられるのです。

しかし、当時は栽培技術が未熟だった上に、病虫害や暴風、洪水などの災害には成すすべがなかったのです。

現在の産地の基礎は戦後に

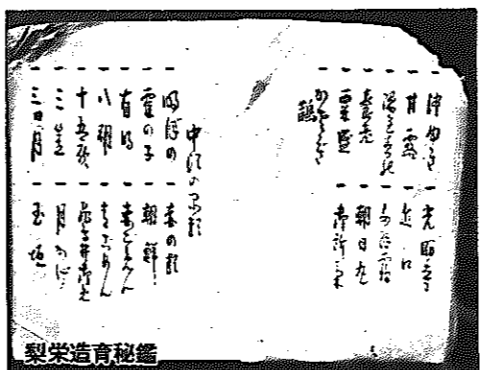
果樹栽培がやや安定してきたのは明治の後期です。第一次世

界大戦後には果樹ブームが起こり、昭和に入って生産量は飛躍的に増えました。県のナシ生産量が全国一位となったのはこのころです。ナシの代表的品種、二十世紀は明治末期から大正初期にかけて大郷、新飯田地区に導入されました。昭和十年ごろから、薬剤の普及や防除の徹底により、栽培も本格的なものになりました。しかし太平洋戦争に突入すると、食糧増産のためナシは強制伐採され、面積、生産量は大きく後退したのです。戦後、食糧不足から果物は高値で取引されました。大郷ではこのころ急速に二十世紀が導入され、産地化の基礎が確立されたのです。また、桃、ブドウなどが各地で新植されたのもこのころです。

本市の果樹栽培は、古くから豊かな土壌や水運の便の良さなどに支えられて発展してきました。しかしその陰には「梨栄造育秘鑑」を著した阿部源太夫、ルレクチエの苗木を導入した小池左右吉など、多くの先人たちの努力があることを見逃すわけにはいきません。改良品種の導入、貯蔵方法の工夫による販路の拡大、栽培技術の向上などの労苦が実り、現在の果樹王国白根の基礎が築かれたといえるでしょう。



ナシの収穫「白根市史」



梨栄造育秘鑑



冠水したナシ